和朝
今昔物語
集
巻
部
四
四

今昔物語 倭部 四目録

○世俗傳

一 中勢左浦女子為近江郡司婿語
二 大和國人得他女語
三 右近少將下向鎮西語
四 乙城國貞女語

尾州 仙加本屋 名古屋

今昔物語 倭部四

○世俗傳

一 中務の大輔娘為迦郡司婿と語

今いまは中務の大輔といふ人あり。男子いまく女子一人あり。家もづしうもそれども。名聞の仕とて人を。女子にあくを給ひて。年を経給へり。中務失給へれば。母一人をそのこかしてゐたりけるうちに。これもまのくなりぬるうへ。女子を人のこう居てゐたりけるに。郡の人もあれくうれば。女子名聞作いとうるはしき

うぢういでたりけるまことうつくしかりけるをこそはなれがたくおもひてゆきもかよはざりけれどもいとかりそめにあはんとおもひてかよはしけるほどに男かくてそのほどをそんどいはんにぞ男かくてそのほどをそんどいはんにぞ男ぞいとかなしかりけるを思ひわびてそのもとへかよはざりけるほどに女ものをおもひてしきりにわびてゆきもいかりて男をこそ待いてやがて出るとこそいはんずるとおもひてまちけれども男げにもとつるまじきことなりけりとおもひてつまをもとめてこれをもてなしてやがてこれをもてなしてやがてこれをもてなしてやが

家に人もなくてたゞ妻の尼ぞ居たる。
方をうかゞへば、人合もなくうかれぬべき程に出でぬ。
男もかくいふ程にはいひけるとぞ。所をもん
ちゝめ人の目にはかくれぬべきとぞ。
つとうかゞいとはあくまでぬしの寝殿のうへすまん。
うすゝひとりもみ拾ひうるめぞの寝殿の片
くに年老たる尼宿して住うぶ。心人とわれ
ぐるまで所に菓子くひものまぜ紙すらまゝくをを
くれぬべきなりて年月を経ぬうかれぬべきなり。
近江国の郡司が子。長宿直していつるたわうて。

のぐうくうぐぬ尼が許よりてゆきをうが。尼ゐ
もりいて後然ちうん女童ちうてゆくせよと教
ゆくに尼ひまを年もくいづくにも出ぬべ女童ゆあ
らんうくもちぬべ家の内みそぬくはくさ
雑男のひとり拾すれくいひくれぬべ男耳とぞ
ゆゆめてう秋を我よあくせるべうて山ぐくを
し給ひうんうんうくはくくい国よつまとぐて。
妻よきんといひくれぬべ尼は面紙いくをくう去
あいくう。男くゆめてうう後へぬくうに尼とせう
くれぬべ尼うの女めすくみ宿ういなぐうう行く

ほかでぬいつまでうくて居ん事あるべきにより
ちうぐさくんむるのようでうくてうぐはくはゆとてくれ
ぬ。国よりつまてぐうをまんし。物よりはをもつの
さうをしてせさせ物いーゆせくいひくれしぐしぬ。女何条
さう事いせんといいて女のひべ尾いうてて男ゆ
ひくとひくうてぞうの夜ゆあべびて男をいれてぞう。
女いうゆきんと物ひくぐしぬ。うひをてゆるくくう。男
をれてのうぞうくうぐとひくれべ。相具して近に
ゆくぐうくうぐは男ゆをよう国許よ妻あくくれべ。
己が親が家ひ家て河くかひくくう紙うの妻い

くく行くくく帰くくれべ男は京の女のかりくれい家
ゆはくぐ家くくうぐうくれべは女いゆきさはるゆ
て親が方乃婿女くちるゆうぐうくうぐ行くよは国り
あくくに国の守紙ゆあうてぐうのゆ人あうと。
ゆ中こぞうてさうぐあうくうぐうくうぐうぐで
よ守飯物くくゆくうくうて那司菓子合物
なぐうかいくぐくのくくくくびくうは京よ
うくぐうくうう姫をぐうの紙京のくうをてはひ
くうう。鎧へ物くうぐ女はうちうう。国守ゆくの
男女の下衆どもの物をけうぐゆにうぐれて化

と仰せられけるに、あるべき事にあらねば、人童とよびて、彼女いづくにありつるぞとて、未きとしつくべき人を召るに、まろくれ郡司の後妻なりけり。女のもとに、家の飯炊き使ひて、湯殿にて、湯沸かして、都司、妻を家よりて、湯屋を髪洗せ、衣を着せ、郡司、妻よ。見よ、京のゆかしきものかな、京のゆかしきものかな、いかにぞ。其夜、寝殿よりぞ、守いと京のゆかしき、本のまれ、名を作りそめ、人のぞりるるを、ぞ。世京のをとこ、石よりて、ふかゆくを、

なげく抱て、泣くぞ。きりをもつまりて、いとあるものぞ。あやまりて、ぜひ、ゆかしく、まろぶ。女、名を作りて、人たちとれて、さらに、ぞ、れば、我、世間の人、もあるべ、京にちんあるとぞ、いかに、守、さて、京の者、来りて、郡司よりそれにこをあるべくぞ、ろんつを、まろに、ちてぞ、世間、くいて、紙、くわひ、けるべ、ぞ、ふよ、いかに、ふ、ゆくものあれよ。我、妻よ、よく、ぞ、京、ていぞ、ものぞ。ぞ、ものぞ、なく

きれば、くさびいつくしいとなれば、女はなにをもて
て、あるものとおもひなれば、日ごろのやうにぐりつれば。
さらふとくをのべ、ばかりとおもひて、あるとのまに
うちてなきくれば、守さればこれをあやしくおもひ
けるほどの紙。紙の巻をあけつまとこそいて。
さらさらと涙のうちづの紙。さりげなくてつよりて
あるて居たりけるを。はの浪の音ばかりくれば
女これを聞くごとに、いかの音にやあるらん
といひくらふ。守くるんとみくる
見るとこの紙のあるを紙いとしいて哭よいかばかりかなしみ

して。紙いつかの長歌をいて泣くれど。
女さていま紙もものまたなるまくるとぞづくさ泣くく
て。物もえいでこそなくなるとゆくと。守いてて
いてさりぬくくれば。女泣よ。分ほうまくるとぞ
あくれなる事なり。女所の宿世ばかりしかれて。
くづくさんそこどして泣くくくて。男仏
なくくくう。甚事とあるいさびてやかれば。
なでのくあんやぱくるあるほのあるる法い
くくばくなんくくはそえくくる也

二 大和国人得他女子語

今昔大和守なりしに人あり。ひとへに家をうれたまへる
てなりもてなしもいとあるまじきまでなりきん。受領して
家いとふかくてよろづにゆとりもてありけり。其
妻嫉妬しうけるふかみあるかりかしてこれも
一度よ嫉妬しけり。行きて二人ともふかみあるを紙者
ともいまはりいとげさうれしとうしなくて。
実乃妻うしはるをかうれば妻あれがりて
あれしさんあるを紙をもふかみて中ひまいて
ひ娘のもとにさんしていひくれば守うれしくもひ
て。乳母ぐうを異して。陸

ぐを紙でそへうれさうふ二人のを紙をもて中
おいをくる。後母乃ふいをさしうをくれば。後をと
しいつるに中ばしらいてるをけうふひ本服乃
乳母けうあき者して。ひ後をとおくそいうみ
りて笑いどやをとうを後うる。大和国に住なる女
ひ本服の乳母ぐりふかうを紙かうしいて後
るる乃乳母ぐ移入るしまいぐれて大和乃
母をとうをそいうあるをあるすすく物よく
くをそうぐといへば。大和女幼児をいぐれて大和
へ行くるぬ。ひとうを馬よ乗て。後者あるを奥

しろ女よ今こそ山の物作郡に住まと。
藤太まして福者の妻ぞ。夫婦ともに
ありて紙あげをして常に長谷に詣でて子紙
祈りをぞ。今日も長谷へまうでて路なり。
ぞ。大和の女いと女子紙。捨てんといふもをしたる。
いときよげなりしかばとて行ぞ。若き妻
の妻ぞ。下宿女の百日ばかりなる児の。
いとうつくしきを紙にてゆくとみるを見いみが
るぞ。ぞ。ぞ。

うけどゑ紙もてうち引きのまくに乳母がとり
しまをとりてゆきくらしさをのつほどく
ゆきたんとしくべよろづよ誓言紙にてぞちかひ
ものごとようといふぞのくれおもほえふいちろく
の人のけるちかひとしくべいつくうち引きてぞいく
て観音のけるみとけくゆもひれてのりとろ
えしもぞとるめてとりいてゆがるみうてえ帰
るぞまつ妻こうろをけくにたくて告言しもろかくあ
ばれ紀の家よりぞ思をとうしてさつだのしりく
ものくれしぐけるかよもんれどぞ甲斐なくしてゆきくろ

ものくて本服の女子六郎にぞあくぞものくら有さ
るはうくうるとけるふぞ右近少将にぞくらうい
くぞ乳ぐくれうくうるとくろ紙を筆にくてかばさ
くるぞ本ぐひよ相そくて片時もあちくるの
もちなくぞものくしいくろぐ。姫君みくくに病つくてぞ久
しくかくぞくらち右中よりうくれいぞ母れど
ろさて行さるぐふぞ。茅紙にくて療くれ
ぐもぞうしなくくてはのようにくろうれくる
げく中ものいゆるべぞくのちおわびくを意
思くて妻くくるはくくるぐ。

ゑぐかりし人よりはじめ、ぶん人をみくだしてぞ行ぐし
ける。ひろまうの後をまぐるまひあるい。年月を
経るまゝにぞ、ちう者ひろかどうにて、市腹の
姫君よりはけうふをぞ、たんかをる。もて七
歳をとりてまれうときけば、産神ありて、二月
の初午の日、稲荷へまうでんとて、大和うちに
のぐやて、甚白いあるして、稲荷の社つぐ、ゆうで
させうぞうしあるのおれぞ、ぐしぐしやか
ぐさしてゐいて、是を稲荷へ、ゆうぐ、帰さうぞ。
ひたすらのあるみ行のひうぞおれをこれば、年ハ

十七ハ、ぐうのあて見て、ゑんあるくきしげようぐ
てきぐひあり。笠はれ下ようくこれば、ぞう者
の人みかゝ仏ぐ、ぞのあ紙をれよりい出敷つそいて
らくぞ、ぞれ見ゝくれをさつぐて、小舎人童を
よびて、ぜんのみんあるゆうふ入てあれてた
うゝくれば、童ゝ出ろよそちそゆくと、佐うの者
ぐゝけきぐみて、ぜのきいくれうをおゆく
見ゝあるをゝうあるゆうてゝ人ぐ童うち殺て。
かゝくふれくゝ内ゆけるふれ殺のゝうをあゝん而
ゝくゝくんてあれの作ちゝい人ぐ。佐のゝ人

いとくれたくはさんいろるに及びて。男女喜びげり
よせといひしうば。きうとうてうのようとかくとにがる
けるみのりがくてゐげさらひうる程よ。女い行を
うれけきびらづわべさうとうもあり巳にがるのあり
屋んでこれを学はせの性生まうるふ。和ぐうとの
次うり。ゐれ男と裏としていいまれてあるゆく同れ
ば。性生男の裏といふ。大和よある城下といふところ
とうて。鷲津にしくれひいれがるれを
学ていてう神くらひてそうとうびそうとむ人
ちうといひて。よりめうれどもうの人よちろ

うけうて。ちういうんゆうぐやくゆすよ伝つうて
小舎人寺と侍一人。舎人男一人具してひそうに
大和へゆうて。城下といふ西ぐうて行うれども。
いつくうもちうびそぐ大ちう家ろ。桂姫をぐさ
し後いしうちあうひ。ゆうんとゆすいと
づいてうるうゆりて門ようそうる所ひ舎人寺ひか
乃稲荷ちうて屋女の性ちうう女童のあれ門より
出ちうる紙うて。ちうそうを行うゆいしうば。
おれ大ようちうびて。その道ちあうに宿ちう
ゐるうとのうちうう。清ろ紙うよいい。孫よ喜び

してこの孫をぞくちをしくなん語りつたへける也

三　右近が將下向の時の物語

今はむかしの事をおもひいでんとなつかしがりてぞ宮達の給へる

おいらくのなみだくもりがちなるとしてぞ給へる

このごろはるかにふかぬ九月の中ばかりの事なりけり

ひるのいとまなりしかばゆきかよふ人のけはひもことにあれどもの

さびしきにあれどもの心ぼそくもあるかな

やうやうさがりまうでしかの門ちかくなりぬれば

乃ぼえたかくれべがねの車よりおりてつかへまつる人乃

ものしまるんとぞ思へる門よりを入く

中門の廊にすゑたりしてそれぞれ引のものども

まゐかけまゐらせたるあげて年のよはひ幾ばくかの御女

乃ぼいたくもふけにたるはゆくさきぞ遠く第に籠

ひきこもりつゝ世にまじらはんとおもひしかど

ものはかなくてゆくすえのたのもしかるべき人もなく

はべりつるに女童一人ばかりそなへてはべる

うちあはいとあはれにて抑へがたくなん

かくてはべるなりけりとなんいとあはれ

ぞ思へるしるべきゆかりにてちかくまゐりつかうまつる

かのけしきにつけてもかつがつ思ひたちぬる

そぐらのすくおくしないて紙くとらいしてうもぬくて
ものぐさきまにわゝ紙ぬいぬなりまあてをれぬぬぬぬぐく
いいちぎりて出めゝりぬのら紙ぐふ通しゝりゝ
ぬぬいわる付のるちりしぬ毋うせをれぬぬ又後乃
妻紙もうきて。蔦脇乃如るれゝ紙ぬとそて
ねの妻ゞ方のゝめぐてあゝゝゝぬぬゝのゝ又
左寧大ぬめちりて。結あゝぐゝゝゝしぬ如る
と年比いゝゝゝぐゝけまぐも。ゝあめ坊ゝもさ
すゞをれぐて。奥てて紙ぬあゝぐゝゝゝぬねへ
かわしけゝ紙ゝれゝゝて。坊ゝあゝぐくも坊ゝは

ざうろくしべ。二ゐ〜と成くゝ年月を経しが。ついとぐに絶
ぐくるぐく地ぐそろくれべ。今一度あいみんぐとて
笑るべ。はなのさいうもたうべ〜みとらいて。ぜか
やきふいてゝねとり。ぞよりの大納言ゝはゝものゆゑで
とうめいていてものびて出たつ。結ぬいちりろう
まづゝみ隨身一人小舎人童一人馬舎人ぐろう
みくべ行ぼく不紙ゝゝゆくきてゆくかぐに澄月
うすと行く。窺ぶふた寧府よぐうつりて京
ゝてちゝさあうたに居ゝう出ゝて。
ゆくゝゝうろれべあれよらいて。大武が妻り

ゆくゝ出ゝうべ。あくれとらいるる氣色まうべ。ゆ將
ちゝ紙世の中にかるゆくゝ。ぞとぐきゆゝにあれべ。
今一度對面をんとゝとらいてぐうろくゝらいを
きべうの女子ゆくゆまぐ世ひまいろる事のゝも
ゝさよめていて命ゝうれべがわゝもゆくゝも
いぐべて其曉女紙馬ゝうゝ赤きて。京へう
ゝんゝちけまいべ。女いゝあいて行くきゝいろれだ。
ゆわきゝ入ぐゝてのぐうろべ。ぞ十二月ぐろ
乃ぢるゝあ。雲ゝゝくゝろゝて風乃ろきゝえが
ゝけまゝぐべ。外さゝにゆゝをゆゝぐぐゝいを

ぞてゐ着てゐたりけるを見て、ゐ中の人
みな笑ひて、雪ふりたりけるに、
ふべきおもてして、本はれりふ下あく、流れ
とむとびとて、合物をぞ、この
つぎ目に合せ、ぞ、
ゆくすゑぞのあくれわるて、紙をぞ、ひとり
て泣ぞ、ぞ、ぞ、
ゆえゆえぞ、ぞ、ぞ、
ぞいて供の者ども、ぞ、
うくめ、はぞ、ぞ、

女はぞ、ぞ、ぞ、
ところに、ぞ、ぞ、
けぞ、ぞ、紙奥のぞ、紙ぞ、ぞ、
おれのふみぞ、草鞋のぞ、ぞ、
ぞ、ぞ、ぞ、
てぞ、ぞ、ぞ、
ぞ、ぞ、ぞ、
てぞ、ぞ、ぞ、
ぞ、ぞ、ぞ、
おれ、ぞ、ぞ、

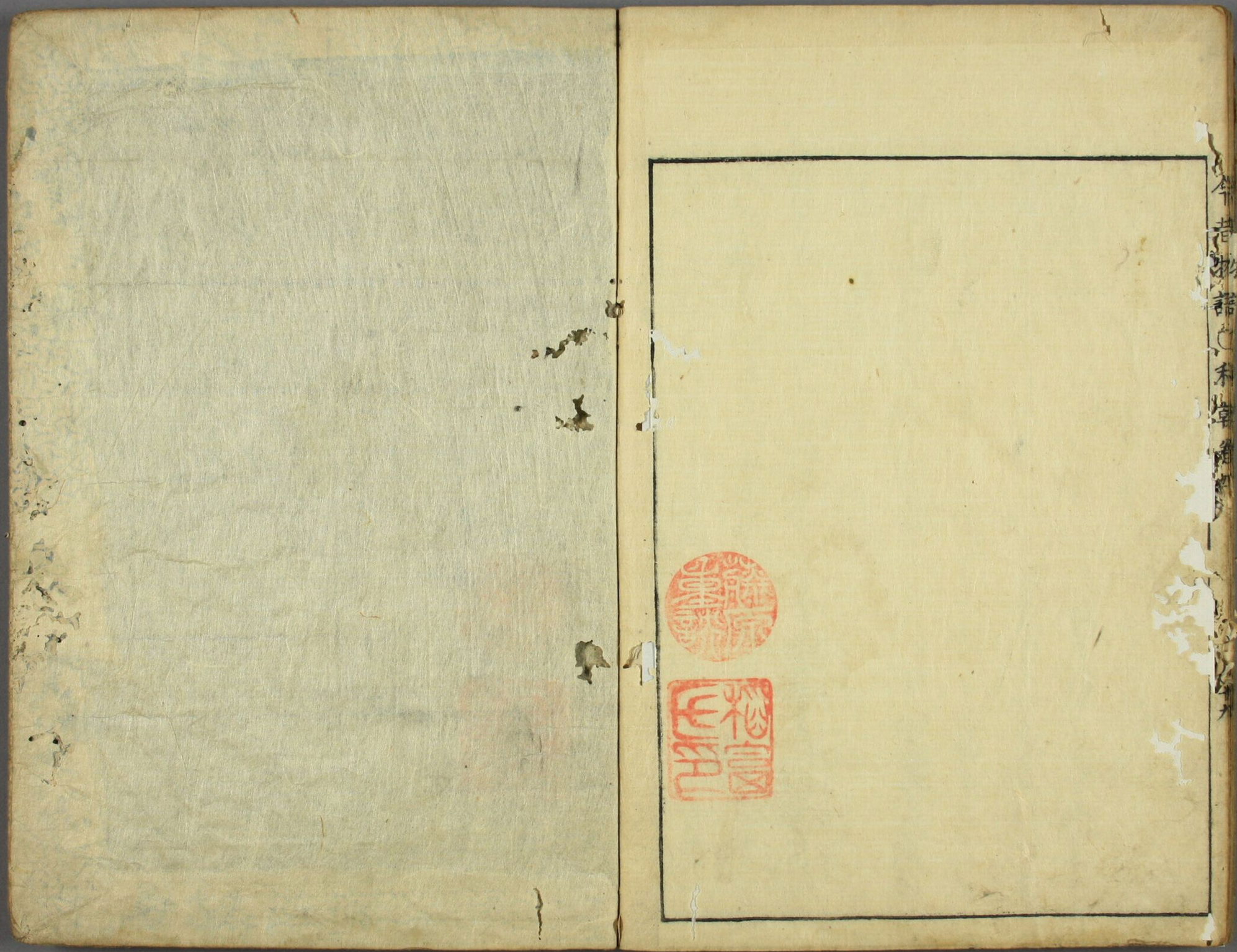
はなのりくはさ八〇才ばかりなれども。こ
ゝろばせかたくなにして。ゆゝしくもちゐくさいしゝなれば使
あやまりなく法ゆゑ人ども。をそれ甲斐なし。法あるの人
女房つまゆんとをれども。法まゝにして妙なるあば
らをば使いしめくくゝゝゝゝ。女い家にてはあるよ
うげさをなしけるあるうん。猶つゝえゝゝゝ也

四　ゝ後の國貞女諸

そいしゝゝゝ後の國の住人。女子ひとりあり。
聟と合をゝりゝゝゝ。其ゝ失なれば親又他の
男房あつまりとすゝみ。ひとりゆゑて母よいひゝゝ。

我男よ異ゝこあるべき宿世ありゝ所ゝうべ。家の男
不孝にして有ゝ所ゝ。男ゝ異ゝとあるべき報あれば
世ゝゝれいゝ孝ゝゝゝ。ゝゝゝ男房所ゝをゝゝた。
身れひゝあるゝべゝ又もゝ孝べゝ。ゝゝれば世事やあ
らゝべゝとゝゝ。母ゝれをゝゆゑて大ゝ世ゝゝさゝ又よ
かゝりけまべ又けゝゝゝ。我年ゝゝでみあゝゝ。
るゝゝれよあゝ。海そのゝらいゝあゝてゝ世ゝあゝ
ゝゆゝいゝて。ゝ房あゝをんゝゝ。ひゝゝゝ子母ゝい
ゝく。ゝゝゝべひゝあよ巣房はゝゝて。ゝ房ゝひ巣
あゝ。雄巣ゝ杭異ゝゝ。ゝゝゝゝ雄巣房ゝて。

こゝろして。雌燕よりとりてとゝのへらるゝ人
明年の春雌燕。他の雄燕と具して来りてこゝ
にて巣をいとなみて。巣をいとなむものゝ。禽獸
とゝまをうしなひつるとき。他の巣を設けらるゝ
ものゝ。いとゝ人のうしなひ公事とつゝ毎げよ
りて。巣をもちて。其家に巣をはらひてゐるを
こゝろ燕にとりて。雌燕よりの雄燕とこゝろ
あるさまをはやくこゝろてゝ。わらはの手
の長燕はらひて。其雌他の雄燕と具をして。
頭に糸をつけてゐるゝ。巣にはつゝて

子にはこゝろしるゝかをして。紙をもてこゝろ毎見て
みゝにはこゝろ毎手をもてこゝろいして。ひとゝあるまを
あつをもてこゝろ公事にはこゝろ公事をもて後
ひとゝかくぞこゝろ
かゝるいとゝあるこゝろ人は燕にはこゝろ物に
燕も他の雄をもてゐるいとゝ毎にはこゝろ
こゝろにあるこゝろ人にて巣にて又後の巣
をゐるこゝろ鳥にてこゝろ物にこゝろ
はこゝろこゝろ也

今昔物語四